

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解くⅡ

2009.07.01 （聞き手 高橋素子）

高橋 前は、「温故知新」・・・
新しい知識や見解を得るためには、昔の物事を研究し吟味しなければ・・・と言うことで、107年前の紅緑の「滑稽俳句集」の世界にお導き戴きましたが・・・107年前も今日同様、滑稽文学、滑稽句は今ひとつ世間に浸透していなかったようでしたね。

会長 俳諧の連歌は、江戸時代、芭蕉が文芸として高めようとしたために真面目になってしまった。
そこで・・・「笑い」を渴望した人々が、「前句付」・・・というかたちで川柳を生み出しました。
「笑い」は川柳に走ったわけです。

高橋 その「前句付け」ってなんですか。

会長 五七五 七七 の「七七」を提示して 前句・・・
つまり五七五 をつけてください・・・ということです。

賞金を出すからと募集したんですね。たとえば
「切りたくもあり切りたくもなし」という七七の題を提示する。すると「盗人を捕らえてみればわが子なり」・・・という具合に 前句をつける。

たくさんの人が投句料をそえて応募した。・・・選

者のひとりに「柄井川柳」という人がいて、この文芸は川柳と呼ばれるようになったわけです。

高橋 成る程、面白いですね。それが川柳の起(おこり)なのですね。

では、話を元に戻しますね。
前回、107年前に、紅緑も会長と同じ「なんとかしなければ・・・」という思い、志で「滑稽俳句集」を編集したことが分ったことは面白い成果でしたね。

会長 紅緑は「滑稽句」を「好きで蒐集した」のでした。
それには、常に全体を見渡す必要があったわけです。

私も俳句王国という番組の司会をしていたから、つまり俳句界の傾向を広く見渡せる立場にありました。そして「滑稽の不足」に気付いたのです。その結果・・・紅緑同様、「なんとかせにゃならん」ということになったわけです。

高橋 ところで、前回では、凡例に続いて自序十四ページのうちの八ページの始めで終わってしまいました。
(笑い)

今回は元禄、享保は理屈を脱する事は出来ず、天明に至って稍稍一転化し、文化の一茶に至って全く理屈を離れた事がわかると、具体例をあげてご解説戴きましたので、今日はその続きからご説明下さいね。

会長 説明・・・
というより一緒に考えて読み解きましょうよ。間違った説明をしたら共同責任になりますから(笑い)

高橋 それはともかくとして、江戸中期の享保時代の横井也有は、この時代、彼に匹敵するような人がいないから偉いのであって、彼は理屈を脱することは出来なかったと句の具体例を挙げています。

☆ 背の高い人に下手あり菌狩

☆ 木の動く日は動かさぬ扇かな

☆ 能う賣れる日を炭賣の寒哉

ご説明下さいね。あら、やっぱり言っちゃた！
(笑い)

会長 ☆背の高い人に下手あり菌狩・・・
背丈の低い人のほうが菌狩は有利だからね。反論できない。納得です。
しかし、これは理屈になります。

☆木の動く日は動かさぬ扇かな・・・
これは 謎々俳句に近いね。風が吹いていて木の枝が揺れている。そういう日は涼しいから扇を使わなくて済む。ということです。

☆能う賣れる日を炭賣の寒哉・・・
炭が良く売れる日は寒い・・・売れるから嬉しいのだが、そんな日は火鉢に当たっているわけにやいかんから寒い。というわけですね。これら全部が理

屈なんですね。

高橋 更に、この理屈が少なく表現が多才で、イヤミを免れたものがあるとして次の三句もあげてみますよ。

☆ 足と鋤三本洗ふ田打かな

☆ 角のない人と生まれて頭巾哉

☆ 嘘の旅して能因が暑さかな

一句目はともかく、二句目なんか、面白いのかなあ？

会長 田打ちは「春耕」ですね。田を打ち終えて川端で鋤を洗うのでしょう。足と鋤三本・・・
足が二本と鋤一本で合計、三本ということになります。

☆ 角のない人と生まれて頭巾哉

角のない人間に生れたから頭巾を被ることが出来る・・・としています。

☆ 嘘の旅して能因が暑さかな

能因法師は旅吟の先駆者ですね。

☆ 都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く

白河の関 という歌を詠んだところ・・・嘘だろう
旅はしてないだろう。机の上で詠んだのだろう
と批判されましたね。それは京都から白河の関までは
一ヶ月半ぐらいしかかからない。霞の立つ
春から秋風の吹く秋まで半年もかかるはずがない・・・
というわけで。この大げさな歌いぶり
が、本当は能因は旅に出なかった。というような

伝承を生んだのでした。

☆ 嘘の旅して能因が暑さかな・・

旅をしたように見せかけるため「庭」に出て肌を焼いたらしいですね。(笑い) だから暑かっただろうと・・というわけです。

高橋 能因法師はそんな事を・・(笑い)
それは面白いですね。

更に、紅緑は、又、理屈を嫌いながらも、也有はこの伎倆があるが為に、詠物の巧みさは到底他のひとが及ばないとして、次の三句もあげていきますよ。

☆ 福祿壽 頭まで風の届かぬ團扇かな

☆ 柳に蛙の圖 見付たり蛙に臍のなき事を

☆ 川涉布袋 鷺に似ぬ足を小鮎の笑けり

ふっふっふ！単純だけど結構面白いですね。

会長 七福神のひとり「福祿壽」は 頭が長いですね。
だから團扇の風が届かない。ホンマカイナ・・の可笑しさがあります。

次に・・

☆ 見付たり蛙に臍のなき事を

柳に蛙の圖とありますから・・これは画賛ですね。蛙には臍がない。実に気楽に詠んでいます。まさに即興の可笑しさでしょう。

☆ **川渉布袋 鷺に似ぬ足を小鮎の笑けり**

布袋は七福神の中で唯一実在の人物です。中国の唐の時代の末期禅僧がモデルになっているんです。大きくふくれた腹をして、手に杖を持ち、大きな布袋を背負い、施しを求めて市中を歩き、布施を受けた物は何でも袋の中に入れて歩いたのです。

背は低く太っているから脚も太い。だから鷺の足には似ていない。布袋が川を涉るとき小鮎が笑った。ということでしょう。

高橋 先を急ぎますね。

紅禄は、滑稽作家の三傑は、横綱は一茶であり、也有と大江丸が東西の大関だと結論付けています。大伴大江丸は初め談林派の俳諧にも親しんだと言われる江戸後期の俳人でしたね。

大江丸の傑作は、すべて模倣に成功したものだとして、次の五句をあげてますよ。

☆ **春の夜のゆめゆめ油断すべからず**

☆ **竹の子やあまりてなどか人の庭**

☆ **秋来ぬと目にさや豆のふとり哉**

☆ **ちぎりきなかたみに渋き柿二つ**

☆ **月に柄をさしたらば誰か何か、む**

ふっふっふ！

確かに何処かで聞いた様な句ばかり（笑い）

会長 大江丸は蕪村や几董などとも交際は広くその句は軽妙洒脱。

滑稽の天才。今風に言えば模倣というよりパロディーですね。

二句めと三句めが特に可笑しい。

「あまりてなどか」は百人一首に出てきますね、
「浅茅生の小野の篠原忍ぶれどあまりてなどか人の恋しき」からいただいてますね。

秋来ぬと・・は、古今集の「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」でしたね。大江丸は聴覚を視覚に変えてしまいましたね。

五句目の「月に柄を」・・あれは、誰でしたか
「月に柄をさしたらば良き団扇かな」という句がありましたよね。

高橋 確か、俳諧の祖と言われた山崎宗鑑の句ですね。
あら、もうこんな時間！先を急ぎますね。

「一茶に至ては殆んど常識を以て測るべからずである、彼が最も大膽な句法は最も奇警な趣向とうまく調和して動かすべからざる事になって居る。」と書いてありますよ。

会長 奇警・・は普通には思いつかぬ、しかし、するどく人の心を掴むことですね。
それが大胆な句法で・だから常識では太刀打ちできないよ・・と言ってますね。

高橋 続いて一茶の句集の初めの方にはこんな句が沢山あるとして、次の五句を挙げていますね。

☆ 鳴猫に赤ン目をして手鞠かな

☆ けろりくわんとして鳥と柳哉

☆ 寝て起て大欠して猫の恋

☆ 親分と見えて上座に鳴蛙

☆ 瘦蛙負けるな一茶此にあり

そして、「赤ン目」「けろりくわん」「親分」「負けるな」・・・等は、俳句が詠まれて以来一茶が始めて使った言葉で、これらの俗語を自由自在に用いて、卑俗にもならず理屈も離れて、怒鳴り散らすやり方は、滑稽の日下開山と言わなければならぬとも書いてありますよ。
「日下開山」？

会長 ははん！
一茶は「日下開山」・・・相撲でいう横綱ですね。
「ひのしたかいざん」・・・と読むんです。
つまり「滑稽の横綱」なんだ。句の意味は大方わかりますね。

「赤ン目」は「あかんべ」「けろりくわん」は平然としての「けろり」を強めて言ったのでしよう。上座で鳴くのが親分の蛙。
瘦蛙の句は最もよく知られている句のひとつですね。

高橋 続けて、也有、大江丸、一茶を比較して・・・
うわー！喩えの言葉がだんだんひどくなって来ま

すね。うーん！
ここは、会長にお任せ致しますね。（笑い）

会長 也有は狂言の如く、大江丸は仁和賀の如く一茶は馬鹿囃子の如くである。

也有は握り屁の如く、大江丸は寝屁の如く、一茶は屁比べの如くである。

これは作風の賑やかさ比べですね。あるいは瞬発力の比較とも言えますね。

高橋 有難うございます。（笑い）

では、ここで平成の俗語を自由自在に用いられた会長の滑稽俳句もご披露しておきましょうね。

★ 歳末の玩具売場の子をはがす

★ とつくりのセーターを編む首つ丈

★ 恋の猫一条纏はぬ声を出し

★ ひまわりのバックの空をぬりたくる

感じられたままに俗語を使われていながら、やはり品があって面白いですね。（笑い）

会長 俳句は俗と雅を二股かけているが、俗に軸足を置くのが滑稽句だと思います。はがす、首つ丈、一

糸纏はぬ声、ぬりたくる。こうした言葉を使うと読者はなぜか「ホッ」とするんですね。
しかし、思いつきじゃない。
もっとも相応しい表現を考えて浮かんだものです。

高橋 すみません。失言でした！
感じられたままでなく、その都度その句にぴったりの俗語を考えていらっしゃるという事です。

それでは先を急ぎますね。
続いて、蕪村太祇らの話に及んで其の奇才が迸る故に、一茶、也有、大江丸等三人の足跡の及ばぬ所に滑稽の縄張りをして居るのは、流石に剛の者と言わざるわけにはいかないと、書いてありますね。

会長 昔も今も似たようなもので大御所は「俳句は滑稽」と常々おっしゃるわけです。
かつての大御所のように、其の奇才が迸ることはないが、「滑稽の縄張り」だけはしているわけです。だから現代の大御所こそ「流石に剛の者」でしょう

高橋 最後に明治当時に話が及んで、月並派の宗匠たちのものは一切取るに足らないが、新派においても滑稽の句作は、甚だ少ない。
一番多いのは、流石に子規翁で、鳴雪翁にも大分あると、書いてありますよ。

会長 これはこのあと紅緑の滑稽俳句集を読み解くわけで・・・おあとの楽しみとしましょう。

高橋 続けて、「併し此に明治の新調として特筆すべきは露月及び虚子の滑稽作であって、露月が漢語を活用して奇想を縦横に動かす事と虚子が狂躰を好んで奔騰勅すべからざるとの二つは、慥かに開闢以来今日を以って嚆矢とするのである。

余は此の二潮流が明治滑稽俳句界を震盪して新たに複雑なる趣向を捕へ新生面を開くの時あるべきを深く希望して止まぬのである。」と、露月と虚子に滑稽俳句界の一大変革を大いに期待して自序を完結していますね。

会長 虚子と露月の二潮流として褒めて二人に滑稽で競わせようとしていますね。

紅緑はそれほどまでに滑稽の将来を案じていたわけでしょう。滑稽く推進の演出家ですね。
しかし・・・紅緑は「滑稽俳句協会設立」までは考えが及ばなかったらしいね。（笑い）

高橋 そうですね。
会長は紅緑よりそこが一步進んでいらっしゃるって・・・（笑い）

やっと自序十四ページを読破した様です。（笑い）
有難うございました。
当時の様子が分ってとても面白いけど、やはり思った通り大変ですね。

では、次回はいよいよ107年前の滑稽俳句の数々のご披露を・・・また、面白いご解説よろしくお願い致します。

会長 難しい言葉が出てきて大変。
先が思いやられます。

始めたからには戻れない。梅雨鯰の季節ですが、
「鯰は」地獄と呼ばれる罠に入ったら最後出られない。だから滑稽俳句集の罠にはまった梅雨鯰みたいなもんです。地獄です。

(2009年7月号)